魅力的な話し声の演出力がつく

総合トレーニング法

外郎売

白鷺連合会研修小委員会

第０版　平成十二年七月　作成

第一版　平成十三年三月　修正

◎ プロがトレーニングに使っている『外郎売（ういろうう）』のセリフ

★ 俳優とかアナウンサーのような、声とか言葉を職業としている人たちが必ずといっていいほど発声のトレーニングに使っているセリフです。

★ このセリフは、二代目市川団十郎の作で、いわゆる早口言葉を集大成したものですが、ただ難しいセリフであるということだけでなく、言葉の科学的な分析が行われ、次の十項目の練習ができると述べています。

① 発声練習　② 発音練習
③ 訛音の訂正　④ 声の出どころの転換
⑤ 緩急の練習（テンポ）　⑥ 間の問題
⑦ 昇調降調（イントネーション）　⑧ 声の強弱
⑨ 高揚、強調　⑩ 調子（ピッチ）

★ せき込んで早口になってはいけません。落ち着いてゆっくり、明瞭に言っていれば、素晴らしい早口言葉に聞こえるものです。

★ 練習方法の参考

・ 詩吟の稽古を始める前に、みんなでゆっくりハッキリ鮮明な声で唱和してみるのも良いでしょう。
・ 分担を決めて、順番にセリフをつなげていくのも良いでしょう。

◎詩吟の稽古の合間に、『外郎売』のセリフに挑戦して見ましょう。「漢詩の素読が上手になること請け合いです。」

（一の段）

①拙者親方と申すは、御立会にも先達て御存じのお方もござりましょ。

②お江戸を立って二十里上方、相州小田原一色町をお過ぎなされて③青物町を登りへお出でなさるれば、欄干橋虎屋藤右衛門、唯今は剃髪いたして⑤円斎竹しげと名のりまする。

⑥元朝より大晦日まで各々様のお手に入れまするは此の透頂香と申す薬、昔ちんの国の唐人⑦「外郎」と申す者⑧我が朝へ来り、此の名方を調合いたし持薬に用いてござる。

神仙不思議の妙薬、時の帝より叡聞に達し御所望遊ばされしに、外郎即ち参内の折りから、件んの薬を深く秘して冠の内に秘めおき、用うる時は一粒づつ冠のすきまより⑨取出だす、よって帝より其の名を⑩透頂香と賜はる。

---

①言い始めです。ゆっくり落ち着いて、高からず低からずの中音で始めてください。

②「立って」までいって、「二十里」に特に力を入れ、「上方」の二字を軽く力をぬきながらいう。

③屋号と名前は下っ腹に力をいれ、低く、太い底力のある声で。

④「唯今は」の三文字は、軽く、それでいて力を抜いた高い調子。

⑤「円斎」は胸に力を入れ、「と」以下は軽くいう。

⑥一息いれ、気分を変え、軽く愛嬌っぽく

⑦「ういろう」をはっきりと。

⑧「来り」を特にきっぱりと。

【叡聞＝天子がお聞きになること】

⑨力をぬいて軽く。

⑩「透頂香」をきわだたせてはっきりと。

（二の段）

①すなわ　即ち文字にも　頂に透く香と書いて　透頂香と申す。唯今は此の薬　②殊の外ひろまり、透頂香という名は御意なされず　③世上一統にただ「ういろう」「ういろう」とお呼びなさるる。

慮外ながら　在鎌倉のお大名様方、御参勤御発足の折りからお駕籠をとめられ、此の薬　何十貫文と　お買いなされ下されます る。

④も　若し　お立の内にも　⑤熱海か　塔の沢へ湯治にお出でなさるるか、⑥又は伊勢へ御参宮の時分は　必ず門違いをなされますな、お下りなされば左　お上なされば右の方、町人でござれども　屋造りは、⑦八方が八つ棟　表が三つ棟玉堂　造り　破風には　菊に　桐の　薹の　御紋を御赦免あって、⑧系図正しき薬でござる。

①非常に軽く

②「殊の外」を急に力をこめて。

③中音で、調子も普通。

④軽く細い調子で。

⑤中音。

⑥「又は」に力を入れる。。

⑦「御赦免あって」までを一気につづけて・・。その中でも、「玉堂」「桐のとう」の二ヶ所には力を入れて。肺の空気を全部出してしまうように続けるのですが、テンポは緩やかにすると、立板の水式の素晴らしいしゃべり方になるでしょう。

⑧「御赦免あって」で息を出しきり吸いこんでいるが、ここではなるべく落ちついて息をだすように。

【玉堂＝玉で飾った御殿】

【破風＝日本建築で屋根の切妻についている合掌形の装飾板】

（三の段）

近年は此の薬、やれ売れる はやるとあって 方々に看板を出し、①小田原の炭俵の本俵の三俵のと名づけ、焙烙にて甘茶をねりそれに鍋すみを加え、或いはういなん ういせつ ういきょうなどと似たるを申せども、平仮名を以って「ういろう」と致したは親方円斎ばかり。

見世は昼夜の商い、暮れて四つまで四方に銅行燈を立て、若い者共入替り立替り御手に入れます。尤も値段は一粒一銭百粒百銭、たとい何百貫お買いなされても、いっかないっかな 負けも添えも致しませぬ。

さりながら振舞いまするは百粒二百粒でも厭いは致さぬ。②最前から薬の効験ばかり申しても、御存じのない方には 胡椒の丸呑白川夜船、さらば半粒づつ振舞いましょう。御遠慮なしにお手を出して、つまんで御覧じませい。

①四つ出てくる「だはら」の一つ一つに念を押すようにし、「：のと」の二字には特に力をいれる。

【焙烙＝素焼きの平たい土鍋】

②軽い感じでテンポを早くする。「：御存じのない方には」までは一気に。

【胡椒の丸呑み＝胡椒を丸呑みにしては、その味がわからない。吟味しなければ真義を知り得ない例え】

【白川夜船＝京を見た振りをする者が、京の白川のことを問われ、川の名と思って「夜舟で通ったから知らぬ」と答えたことから云う。熟睡して前後を知らぬこと】

（四の段）

第一が男一統の早気付、舟の酔 酒の二日酔いをさます。①魚 鳥 茸 麺類の食い合わせ、其の外 痰を切りて声を大音に出す。

六塵 八進 十六ぺん、製法細末を過たず、かん れい うん の三つを考え、うんぽうの補薬 御口中に入って 朝日に霜の消ゆる如く、しみしみとなって能き匂いを保つ。

鼻紙の間に御入れなされては 五両十両でお買いなされた匂い袋や 掛け香の替わりが仕る。先ず一粒上って御覧じませい。

口の内の涼しさが格別な物、②薫風 喉より来り 口中微涼を生ず。③さるによって舌の回わる事は 銭独楽がはだしで逃げる。

どのような難しい事でも さっぱりと言ってのけるは此の薬の奇妙。証拠のない商いはなりぬ、さらば一粒喰べかけて其の気味合いをお目にかけよう。

---

①「魚、鳥、茸」は一つ一つ区切って。

【六塵＝人間の感覚に働きかけて、その心性を汚す六種のもの（色、声、香、味、触、法）をいう】

【うんぽうの補薬＝布子（ぬのこ）に入れた薬】

②荘重な感じ、漢詩でも読むようにもったいぶって。

③「逃げる」を太く、重く。

【銭独楽＝銭の孔に軸を差して芯とし、糸を巻いて独楽のように回すもの】

（五の段）

①ひょっと舌が廻り出すと矢も楯もたまらぬ。サア あわや喉、②さたらな舌にかきはとて、③蛤の二つは唇の軽重。④開口爽やかに うくすつぬほもよろを あかさたなはまやらわいっぺきぺきに へぎほしはじかみ 盆豆 盆米 盆牛蒡。

⑤摘蓼 摘豆 摘山椒。⑥書写山の社僧正。

⑦粉米の生噛み 粉米の生噛み こん粉米の小生噛み

⑧繻子 繻子 緋繻子 繻子 繻珍。

⑨親も嘉兵衛 子も嘉兵衛、親嘉兵衛 子嘉兵衛 子嘉兵衛 親嘉兵衛。 古栗の 木の古切り口。 ⑩雨合羽か番合羽か。

⑪貴様の脚絆も革脚絆、⑫我等が脚絆も革脚絆

⑬しっかわ袴のしっぽころびを、三針はりながにちょっと縫うて 縫うてちょっとぶん出せ。

---

①「ひょっと…出す」は軽く、高い声で。「矢も楯も」は強く。

②中音で、調子も普通。

③「軽重」で息を吸い込んでおく。

④「開口」から「ぼん牛蒡」までを一息で言います。コツはあまりあわてずに、テンポを遅くし、しかも流暢に、滑らかに。そして正確な発音を。

⑤三つの「つみ○○」を、同じ拍子で言う。

⑥「書」と「社」に力をいれる。

⑦「こなまがみ」などは、区切って高い調子で言うとやりやすい。

⑧これは中音、同じ調子で。

⑨「親も嘉兵衛」の最初は低く、だんだん高くし、「子嘉兵衛親嘉兵衛」でピークに。そしてまた低くして、「古切り口」で一番低くして止める。イントネーションの変化を。

⑩太い調子の声で、対照的に言ってください。

⑪太い声で、⑩と同じ要領で。

⑫太い声で、⑩と同じ要領で。

⑬最初の出しは低く、真中は細く高い長子で言います。頂点になる部分は「縫うて、縫うてちょっと…」のあたり。

（六の段）

河原撫子　野石竹、①のら如来　のら如来　②三のら如来に　六のら如来、③一寸のお小仏におけつまづきやるな。細溝にどじょうによろり。

④京のなま鱈　奈良　なま　まな鰹　ちょっと四五貫目。

⑤お茶たちよ茶たちよ　ちゃっと立ちよ　茶たちよ　青竹茶煎でお茶ちゃっと立ちや。

⑥来るわ来るわ　何が来る　⑦高野の山のおこけら小僧。

⑧狸百疋　箸百膳　天目百杯　棒八百本。

⑨武具馬具　武具馬具　三武具馬具　⑩合せて武具馬具　六武具馬具。

⑪菊栗　菊栗　三菊栗　合せて菊栗　六菊栗。

⑫麦ごみ　麦ごみ　三麦ごみ　⑬合せて麦ごみ　六麦ごみ

---

①なめくじがにょろにょろと這っているような感じを出してください。唇を突き出す時に、頬の筋肉をふくらせるように、誇張してうごかす。中音。

②、①と同じ要領で…。

③「一寸」から「…やるな」まで、細く高い声で、テンポも速く。最後は、によりといった感じを出す。

④「奈良なままな…」がなまなまとならないように。

⑤最後の「立ちや」はきっぱりと。

⑥対話をしているように、二つの音色の声で分けて言います。

⑦高野を広野の発音にしないこと。

⑧中音で。

⑨男性的な太く低い調子で。

⑩、⑨と同じく男性的に。

⑪女性的な細く高い調子で。

⑫、⑪と同じく女性的に。

⑬中音で、普通に。

（七の段）

①あの長押の長長刀は　誰が長長刀ぞ。

②向こうの胡麻殻は似の胡麻殻か　真胡麻殻か　あれこそほんの真胡麻殻。

がらがらぴいぴい風車。おきゃがりこぼしおきゃがれ小法師、ゆんべもこぼして又こぼした。

③たぁぷぽぽ　たぁぷぽぽ　ちりからちりからつたっぽ　たっぽたっぽ　干だこ落ちたら煮て食おう。煮ても焼いても食われぬものが、

④五徳　鉄急　かな熊童子に　石熊　石持　虎熊虎鰒。

⑤中にも東寺の羅生門には　茨木童子が　茹で栗五合　掴んでおむしゃる　かの頼光の膝元去らず。

⑥鮒　金柑　椎茸　定めて御段は　蕎麦切り素麺　うどんか愚鈍な　小新発知。

---

①女性的な声で。「ぞ」は力を入れる。

②太い声で。

③つづみを習う時の、口三味線のように、ポンポンと言ってください。

④二分の一拍子。リズミカルに。【五徳＝儒教の五得目（温、良、恭、倹、護）】

⑤ここから次第にテンポをゆるめる。

⑥「鮒、金柑」から「小新発知」まで一息に言ってください。リズミカルに、拍子をとるようにして…。

（八の段）

①小棚のこ下の　小桶に　こ味噌が　こ有るぞ
小杓子　こ持って　こ掬い　こ寄越せ。

おっと合点だ、心得たんぼの　川崎神奈川
保土ケ谷　戸塚は　走って行けば、　灸を擦り
剥く　三里ばかりか　②藤沢　平塚　大磯がしや
小磯の宿を、七つ起きして　早天早々　相州
小田原透頂香。

隠れござらぬ　御外郎。　若男女　貴賤群衆の
花のお江戸の花外郎。③あの花を見てお心をお
やはらぎゃっと云う。④産子這う子に至るまで
比の外郎の御評判　御存知ないとは云われま
い。まいまいつぶり　角出せ棒出せ　ぼうぼう
眉に、臼杵　擂鉢　ばちばちどろどろ　ぐわら
ぐわらぐわらと　羽目を外して今日お出での
方々様へ、売らねばならぬ　上げねばならぬ
⑤と息せい引っ張り　薬の元締め。　⑥薬師如来も
照覧あれと、⑦ほほう敬って、⑧外郎はいらっしゃ
りませぬか。

---

①リズミカルに「おっと合点だ」でテンポをゆるめていく。最後は「走って行けば」まで。

②「大磯がしや」は、「大忙しい」と聞こえるように言う。

③女性的な細い高い声で。

④落ち着いて、ゆるやかに。

⑤終わりを思わせる調子。どっしりと重々しく。

⑥ゆったりと。

⑦愛嬌のある笑い声で。

⑧お辞儀をしながら言い終わる。